
仮題。誇り高き一振り

勾掛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮題。誇り高き一振り

【Nコード】

N9711Y

【作者名】

勾掛

【あらすじ】

異世界最強系迷い込み物です。

1話

甲高い音とともに打ち上げられた木剣が手から離れる。立て直す暇はないことを青年、村上六乃は今までの経験から厭になるほど知っている。

眼前に迫りくる突き。遠い距離から飛んできた片手突きを前に足を踏み出すことでかわし、序でとばかりに放った裏拳の一撃は、しかし、相対する老人の顔まであと数ミリというところで急激に勢いを失った。

「本日の訓練、終了」

老人：六乃の武術の師である高須行偵は蹲る六乃に向かって朗々とその静謐な声で告げた。

「いたた。良い線いったと思っただんですがね」

六乃は先の立会を思い出す。

弾き飛ばされたはずの木剣は狙ったかのように六乃と行偵の中間、行偵の空いた左手の中へと綺麗に収まり、勢いのまま六乃の肩口へと吸い込まれるような袈裟切りが放たれたのだった。

(否、狙ったのだろうか)

齢80を超え、年相応に深い皺の刻まれた肉体。175cmある六乃よりも10cm以上低い背丈。

それでも六乃にとって、この芸当を狙って行ったものだと思わせるほどの強さを黒須行偵という師は持っていた。

(遠い、な…)

「おい、六乃。お前え今度の連休空いてるか？」

放たれた言葉に六乃は露骨に嫌な顔をする。

「また碌でもない出稽古の話ですか？嫌ですよ。猛獣相手に1昼夜とか朝起きたら内戦ど真ん中だったとか。どれだけ苦労したと思ってるんですか」

怒鳴る気力すら起こらないといった顔である。

「生き残れてるだろうが。問題無えよ問題無え」

カツカツカと声をあげて笑う自らの師匠に対し、六乃はどこまでも深いため息を以って1つの決意を固める。

無論、次の連休をこのとんでもない思考回路の持ち主から何があっても逃げ続ける、と。

「ととと、警戒させちまったか。実に残念な話だが今回は出稽古じやあねえぞ。

ただのお使いだ。…残念ながら。」

本当に残念そうに肩を落とし、それから六乃の目を見据えて仕切り直す。

「ちよつくら儂の師のところまでこいつを持って行って欲しいのよ。儂も忙しいし何より場所が場所であ。年寄りの身には辛い。お前えも大分腕を上げたしで任せてみて面白いかもしれねえと」

「ちよ、一寸ストップ」

話を途中で止める六乃。行偵は話を切られて不機嫌顔だ。

「師匠の師匠で歳幾つですか？」

「細けえなオイ。儂も正確なところは分からんが、確か100歳くらいじゃないか？それでもまだまだ儂より強い。そんなことはこの際大した問題じゃねえんだよ。向こうからも急かされてな。…しかたねえ、報酬も出してやる。」

「ごそごと足元の袋を一頻り漁ったあと取り出したのは一本の短刀だった。」

「そうだな。こいつでどうだ。銘は景依。備前景依の名刀よ」

それは行偵の所蔵の刀の中でも六乃にとって特別な意味を持つ一振りであった。

。 武術を始めた時、六乃の免許皆伝の証として渡すから選べと言われ、刀剣萬集家である行偵のコレクションの中から手にした一品。

呼ばれるように手に取ったその刀こそが、六乃が今までの地獄とも思える稽古を超えてきた原動力と断言できる。

それほどに六乃の心を捉え続けた刀なのであった。

「まったく、貴方も本当に酷い師だ。それを出されては引き受けないなんて選択肢は採れないでしょう。」

その言葉を聞いて満足そうに一頻り頷いた行偵はニヤリと人の悪い顔をして笑んだ。

しかし、刀のことで思考の殆んどを占領された六乃がその笑みに気
付くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711y/>

仮題。誇り高き一振り

2011年11月29日03時47分発行